

「神の友として生きる幸い」

主任牧師：重田 稔仁

<創世記 15章 1～7節 新共同訳>

-神の約束-

これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。

「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

アブラムは尋ねた。

「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」

アブラムは言葉をついだ。

「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」

見よ、主の言葉があった。

「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

主は言われた。「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。」

<

<メッセージ>

アブラハムは、大胆かつ用心深く、勇敢であった反面、肝心なことでは優柔不断で気弱な人物でした！とアブラハムの人物像について先週、ちょっとdisってしまいましたので。今日は、そんなアブラハムを少し持ち上げたいと思います。

アブラハムについて特筆すべき点としてあげるならば、それは「アブラハムは神の友と呼ばれた。」ということです。

「こうして、「アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた」という聖書の言葉が成就し、そして、彼は「神の友」と唱えられたのである。」ヤコブの手紙 2:23

聖書中の人物で名指しで神の友と呼ばれたのはアブラハムただ一人です。人間性がどうで

あれ、神の友と呼ばれた！これに勝る、アブラハムへの褒め言葉はありません。その点、私もアブラハムを大いに尊敬します。

ちなみに、誰が、実際アブラハムを神の友と呼んだのか。

聖書を紐解くと、

一人はイスラエルの王ヨシャファトがアブラハムを神の友と呼んでいます。

歴代誌下 20:7

「わたしたちの神よ、あなたはあなたの民イスラエルの前からこの地の先住民を
追い払い、この地をあなたの友アブラハムの子孫にとこしえにお与えになった
ではありませんか。」

二人目は神ご自身がそう呼んでいます。

イザヤ書 41:8 新共同訳

「わたしの僕イスラエルよ。わたしの選んだヤコブよ。わたしの愛する友
アブラハムの末よ。」

素朴な疑問ですが、いつ、どうやってアブラハムは神の友になったのでしょうか。

人が誰かと友達になるには、友になる者同士が信頼を育むきっかけや、何かしらの共有体験が必要だと思いますが、アブラハムが神の友となったきっかけとは何だったのでしょうか？

それは、先ほど述べた創世記 15:6 に記してあります。

「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」

創世記 15:6 新共同訳

アブラハムが主なる神の友となったのは、「アブラハムが主の約束を信じ、神がそれを彼の義と認めたことによってです！」

アブラハムが主の約束を信じたとは、平たく言うとアブラハムが、神の真実を認め、神の約束を受け入れ、神と共に生きることに同意したということです。

主がそれをアブラハムの義と認めたとは、主が罪人であるアブラハムを主との隔なき交わりに迎えたという意味です。

アブラハムが主を信じ、主がそれをアブラハムの義と認めた！

これがアブラハムと主が永遠の友情を結んだきっかけです。
もうお分かりだと思いますが、主イエスを信じて義とされた私たちもアブラハム同様、
神の友とされる幸いに与っています。

「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。」

ローマの信徒への手紙 3:22, 24-26 新共同訳

「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。」

ヨハネによる福音書 15:15 新共同訳

主なる神の友とされた私たちクリスチャンライフの質は、この「主を信じて義とされる」恵みの理解の確かさにかかっていると言っても過言ではありません。

「信じて義とされる」とは宗教のお題目ではありません。それを神学的知見や信条と呼ぶには余りに浅薄過ぎます。

それは私たちと主なる神との関係性を決定し、私たちの人生を貫く主の愛しみ体験する主の祝福の何たるかを表した幸いです。

私たちは、主イエスを信じて義とされるという恵み、この幸いを一体どれぐらい、味わい知っているのでしょうか。

聖書の一節

「友はいずれの時にも愛する、兄弟はなやみの時のために生れる。」

箴言 17:17 口語訳

主イエスこそ私たちをいつのときも愛してくださる私たちの友です。主は、私のために十字架にかかり私の罪を拭いさるために死んでくださいました。

それは、私たちをご自身の友とするためです。この主イエスとの友情を私たちはどのように実感しているのでしょうか。

みなさん、長く生きてると大なり小なり心傷つく経験ってありますよね。誰もが同意すると思いますが、小さいころは、傷ついてもすぐ元氣になれたのが歳を取ると肉体の傷同様、精神的な傷が中々癒えにくくなります。

心が傷つくとどうなりますか。

傷つけた相手だけでなく、周りにいる誰彼に対しても不信感を抱きやすくなりますね。たくさん傷つけば傷つくほど人は疑り深くなります。

疑り深い人間の精神状態というのは、心が割れた状態です。心が割れると人は不安定になり生きづらさが増していきます。これらの諸悪の根源が人間の罪なのです。イエス様が私たちの友となってくたさるとは、私たちの諸悪の根源である罪の力を無力化し、罪によって割れた心を一つにしてくたさるということです。

イエス様がわたしたちの友としてどのようにして、私たちの傷をご自身が代わりにその身に受け、私たちにイエス様の心を与えてくださるということ。

これが主を信じで義とされる者、すなわち主の友とされる者の幸いです。

私たちの罪の重荷を担い、罪の傷を癒してくたさる主イエスを人生の友として生きる喜びに私たちの心の目を開かせて頂きませんか。